

何でも出来る便利な個性：数学で送るハーレムライフ ～シリアス
添え～

きかじひ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこにでもいる普通の30歳だった氷城風樹は、ある日、『僕のヒーローアカデミア』の世界に転生してしまう。

テンプレ系神様に出会うことなく始まった転生は、中学生くらいからのスタートだった。

身寄りもなかったが、この世界は「個性」という風樹がいた世界だと、超能力のような不思議な力が大体の人に宿っている、ということを知っていたので、ギリギリなんとかなった。

転生の際、風樹が得た個性はどうやら「数学」。

「IQ」のように数学が得意になる個性かと思いきや、独学で個性伸ばしをした結果、数学も得意になったが物理法則に干渉する個性へと成長した。

せっかくだから、元の世界に戻るような個性の持ち主に出会うまで、この世界でハーレムライフを送ることにしよう。

身体は中学生スタート、頭脳は大学生。

青春をもう1度!!？

目次

入学試験（その1）	1
入学試験（その2）	4
入学試験（その3）	6
入学試験（その4）	8
入学試験（その5）	10
入学試験（その6）	13
入学試験（その7）	16
入学試験（教師サイド）	19
合格発表	21

入学試験（その1）

「A会場の諸君、これより、実技試験を開始する」

プロヒーロー：インゲニウムの静かな声が響く。

先の個性大戦で、まだ学生だったデクを支えた友人の一人だ。

「入学試験は、『流鏑馬』を行う。しかし、ここは雄英。ただの流鏑馬ではない。まず、的は本校のサポート科が誠心誠意作り上げたロボットの……の頭上にあるリングの模型だ」

リングの模型……なぜリング？

弓道の的はダメなんか？

……周囲から白い目で見られている。

つい癖で、声を出してしまったようだ。

小さな声のはずなんだが、まあ、これだけ近くに居れば聞こえるか。

A会場にいる受験者達は、インゲニウムの立つ台を囲むように密集している。個性の都合上、あまり密集している場所は得意ではないのだが、周囲から押されてしまったのだ。

ウラビティを筆頭に、ショート、ダイナマイトなどと並ぶ、有名人だからな。

インゲニウムの説明は続く。

「次に馬だが、会場内に一輪車、二輪車、三輪車、四輪車、スケートボードなど、多種多様な乗り物がある。どれか一つを選び、渡してあるマイクロチップを挿入した上でリングの模型を狙って欲しい」

おい、空を飛ぶとか、移動能力が個性のヤツはどうすんだ？

「む？……良い質問だ。移動能力が個性のものもマイクロチップの挿入は必須だが、乗車は必須ではない」

やば。また声に出てたか？

出てたとしても、そんな大きな声じゃないはずなんだが。

「最後に、リングの模型の扱いだが、破壊した場合は2点。無事に回収した場合は4点。そして、傷ありの回収は3点だ。また、その際、ロボを傷付けたら減点1点。半壊は減点2点。全壊は減点3点だ」

ってことは、ロボもリングも傷付けず、無事にリングを回収するこ

とが求められてるってことね。

「こちらからは以上だ。何か質問は？」

すると、オレの前方の集団から手が挙がる。

「よろしいですか？マイクロチップと同時に渡された用紙には、

1、マイクロチップを破壊されてはならない

2、乗り物を無事に返さなくてはならない

とありますが、ロボットが攻撃してくるのでしでしょうか？」

「いや、ロボットは攻撃してこない。これは、他者の個性使用にも気を配ろうという心構えを具体化したものだ。もちろん、自身が使う際も同様だ」

「あ、確かにそうですね。考えが浅かったです、ありがとうございます」

「いや、気にするな。これからたくさんのことを学べば良い。他に、質問はあるか？」

手は挙がらないようだ。

「ないようだな。では、最後に、この雄英高校の校訓を君たちに授けよう。もう知っているもの多いであろう。せっかくの機会だ……一緒に声を出そうではないか！その後、試験を始める」

いよいよ始まるな。とりあえずこの人が密集してる場所から、移動しないとな。飛ぶか？

などと、オレが考えている時、インゲニウムのインカムには、

(……飯田くんも、上手になったねー)

(出番か……)

(……どーでもいい。今年もモブだらけじゃねえか)

(これからだろ……卵ですらないんだから……)

(さあ、みんな頑張ろう！)

(あんたら……もう始まるよ……)

が聞こえていたとか、いないとか。

「では、悔いのないように声を出してくれたまえ！さらに向こうへ

……」

ゾクッ

急に寒いぞ。足元か!?

インゲニウム。雄英。嘘だろ。

……しまった。間に合うか!?

“アキレスと亀”

『『Plus Ultra』』

と受験生の大合唱が聞こえたとき、インゲニウムが立つ台を中心として、辺り一面が氷の世界になった。

入学試験（その2）

“アキレスと亀”

昔、足がとても速いアキレスがいた。

そのアキレスが、100m先にいる亀に追いつけるかどうかを議論した時に生じた矛盾のことだ。数学の有名なパラドックスの1つだ。

例えば、アキレスは亀の10倍のスピードで走れるとしよう。

（そんな亀がいたら見てみたいがな、速すぎるわ）

アキレスが100m進む間に、亀は10m進む。

アキレスが10m進む間に、亀は1m進む。

これを繰り返せば、アキレスは亀に絶対に追いつけない。

実際には、そうじゃないんだけどな。

というパラドックスを応用して、オレに影響を及ぼす現象をオレに到達させないことに成功した。ただし、オレが現象を把握していないと発動しても意味がない。

今回は、偶然にも予測が当たり、ショートの水だったので、事前に防ぐことが出来たのだ。通常なら、現象を見てからの発動になるからな。

この個性を発動したおかげで、なんとか足を凍らされずに済んだようだ。周囲を見渡すが、何が起こってるか把握できてない受験生が多い。数人は駆け出したようだが。

よし。とりあえず、乗り物の確保だな。

“単位ベクトル”

周囲を確認しながら走る。

多種多様な乗り物。

ただし、無事に返すこと……か。

それにしても、インゲニウム、ショート……

もう1人くらいは、個性大戦の有名人がいると考えていた方がいいな。

そんなことを考えながら、周囲の確認を続ける。すると、

『カエシテホシクバ、タオシテカラダ』

『カエシテホシクバ、タオシテカラダ』

『カエシテホシクバ、タオシテカラダ』

と、電子音声が複数聞こえる。

おっと、赤目のロボットが3体お出ましか。

「流鏝馬」というテーマからすれば、乗車は必須。

ただ、個性の関係から乗ってなくてもよい。

けど、マイクロチップの挿入は必須。

そして、マイクロチップと乗り物、その両方の無事が求められている。

ロボットが向かってくる。

オレは、個性を解除し立ち止まる。

……目的はなんだ？

ここは名を知らないものはいない、超一流校。

雄英高校。

意味のないことは、絶対ない。

ロボットは《敵》……これは間違いない。

リングは、要救助者。人質と考えてもいいな。

とすれば、

マイクロチップは、守るべきもの。例えるなら、ヒーローではないもの。リングと同じで、要救助者か。すでに救助を終えた後に、新たな現場に急行したということか。

そして、乗り物は……マイクロチップを預けるもの。つまり、ヒーロー……なのか？

要救助者を預けた後、個性の都合上、協力してもしなくてもということか……？

ならば、マイクロチップを挿入する前ではあるが、人質を助ける必要がありそうだな。

そう考え、ロボットに近付くと、ロボットが逆走を始めた。

入学試験（その3）

試験監督たちのインカム

（うーん。50点かな。マイクロチップが要救助者までは良かったけど、ロボットに向かっただけでいっちゃった。一人で要救助者を抱えながら戦うってことの意味が分かってないね）

（イヤホンIIジャック。それは厳しい評価ではないか？マイクロチップを要救助者に考えられる人物の方が希少だ。残念ながら、新しい制度でのプロヒーローだって、簡単には出来まい）

（いや、乗り物の件を指摘した子だったからさ。もうちょい考えてるかなって）

（でも、轟くんの氷結には気付いたみたいだったよね）

（クソナードは黙ってる!!？半分野郎が甘えんだよ）

（……全滅したら入試にならねえだろ）

（爆豪くんは、ホンマ変わらんね……）

（全員「集中」）

（(((?!?)))）

（真面目にやろう。大切な入試だ）

？インカム終わり？

ロボットが逆走した。

しかも、向かってきた速さの倍くらいの速さで。

どうしたんだ？

「単位ベクトル」

個性を発動し追いかけるも、更なるスピードで逃げてゆく。

「……もしかして、乗り物が先なのか？」

おそらく、乗り物に挿入されていないマイクロチップが近づくと、遠ざかるように設定されているんだろう。

追いかけることをやめ、周囲を見渡す。

出来れば、そんなに大きくない乗り物があれば……ない。

ロボットに遭遇する前にも確認をしながら走っていたが、ないのだ。

試験会場は、とても広い。

受験生の数だけ乗り物があるとすれば、見つからないはずがないのだが。

インゲニウムの説明を思い出す。

会場内……

どれか一つを選び……

説明を聞いて、会場内に置いてあるものを自由に選ぶ形式だと考えたのが不味かったか。

仮に、乗り物をヒーローだとするオレの想定が当たっていたとする。

ヒーローが都合良く近くにいるか？

……いないな。普通なら、救援を要請するだろう。

だが、今は誰に要請する？

試験監督のインゲニウムか？あるいは、潜んでいるショートか？

あるいは……

「もう、なぜ逃げるのでしょうか」

考えを巡らせていると、そんな声が聞こえてきた。

この声は、インゲニウムに質問をしていた子だな。

オレは近付き話しかける。

「なあ、ショートの氷は大丈夫だったんだな。あんた乗り物は？」

「あんたとは、私ですか？失礼な方ですね。いきなり話しかけてきた上に、あんた、だなんて」

「すまない。名前を知らないし、自己紹介の時間も惜しくてな」

「それもそうですわね。では、要件は何でしょうか」

オレはある予測を元に、提案する。

「ああ。オレとあんたのマイクロチップを合わせてみないか？」

入学試験（その4）

「マイクロチップを合わせるのですか!?? そんなことをして、意味があります?」

「ああ。おそらく、乗り物が現れる。ここに来るまでに周囲を確認しながら来たが、どこにも見当たらなかった。つまり、乗り物を見つけないためには、何か条件があるはずだ」

「それがマイクロチップだと?」

「そうだ。ロボットが後退していったのも、おそらくマイクロチップが関係している。だから、マイクロチップで何かしらのアクションを起こせばと考えたのさ」

「分かりました。やってみましょう」

「……あっさり信じて良いのか? オレが嘘について、マイクロチップを破壊しようとしているとは思わないのか?」

「ご心配なく。人を見る目はあるつもりなので」

「そうか。じゃ、お願いしようかな」

そうして、オレたちはお互いのマイクロチップを近づける。

マイクロチップ同士が触れ合うくらいの距離に近づけた時、それぞれのチップから光が放たれた。

「これは、予想外だな」

「ええ……」

そして、10秒もしないうちに、車輪の駆動音が複数聞こえてきた。

「……なんでもありだな。無人で走行してるぞ」

「流石、天下の雄英といったところでしょうか……」

インゲニウムの言った通り、様々な乗り物が到着した。

「どれにする?」

「よろしいのですか?」

「ああ、レディファーストってヤツさ」

「ありがとうございます。では、こちらのローラーブレードを」

「良いセンスだ。オレは、スケートボードにしようかな」

オレたちはそれぞれマイクロチップを挿入する。

『『エントリーを確認』』

それぞれの乗り物から、認識音が鳴る。

「よし、上手く行ったな。ありがとう。じゃ、行こうか」

「一緒にですか？ ライバルですよ？」

「分かってるさ。だけど、1人よりも2人の方が何かあった時に対処しやすいだろう？」

「……分かりました。乗り物が手に入ったのは、貴方のおかげですね」

「先に参ります。遅れないで下さい」

速い。

おそらく個性を発動したのだろう。

ただのローラーブレードに出せるスピードではない。

“単位ベクトル”

スケートボードに個性を作用させ、彼女の後を追う。

言うだけのことはあって、わずかだが彼女の方が速い。

「あちらにいましたわ」

先行する彼女が声を上げる。

ロボットの集団は、マイクロチップを乗り物に挿入していない受験生を挑発しているようだった。

ざっと10体はいるだろうか？

「“一刀居合”」

彼女が右手を横に薙ぐ。

スパッ

ロボット頭上のリングを真つ二つにすると同時、ロボットから火が噴き出した。

入学試験（その5）

「なんで!?？」

リングを斬られたロボットが火を噴いている。

彼女に端正な顔が歪む。

「どうしてなの？ちゃんとリングだけを斬ったはずなのに……」

そう、彼女はリングだけを斬っていた。

到着したオレは個性を解除し、スケートボードを脇に抱える。

「見てたぞ。おそらくリングを破壊すると、ロボットが半壊するように作られていたんだ」

「そ、そんな説明なかったじゃない……」

「確かに。だが、質問をするチャンスはあった。深く考えなかったオレたち受験生の落ち度だ」

「じゃあ、リングを傷付けないようにすれば良いわけね」

「そうなるな。試してみるか」

オレたち2人は横に並び、ロボットたちの方を向く。

「ねえ、何が出来るの？」

「オレの個性は『数学』。やろうと思ったことは、なんでも出来る。あんたは？」

「また、あんた呼ばわり……私は、水流風香。個性は『流体』よ。よろしくね」

「オレは氷城風樹だ。よろしくな」

「あのロボットたち、止められる？」

「うーん。ある程度広さもあるし、30秒程度なら」

「十分よ」

「なら、任せときな。合図するからよ。『円のベクトル方程式』、『循環小数』 発動」

『循環小数』

突然だが、 $1 \div 7$ の答えを知ってるか？

そう、0. 142857142857…の小数点以下の部分が繰り返し
返すんだ。

つまり、循環小数というのは、ある桁から繰り返しになる小数のこ
となんだ。

この話の繰り返しという部分から、「範囲内にいる対象の数」÷「範
囲を決めるまでの時間(秒)」×10 ||「拘束(繰り返し)時間(秒)」
という効果を生み出した。

ちなみに、単位計算バグってるとか、小数にならないじゃん、とか
のツツコミは野暮だ。出来たんだから使ってるんだ。

閑話休題。

今回は、ロボットは9体。

ちなみに、範囲を決めるまでの時間とは、対象の周囲を1周するま
での時間だ。

スケートボードに乗り、「円のベクトル方程式」を制御しながら1
周する、きっかり3秒。

「今だ、風香!!?止まっている時間は30秒だ!!?」

「馴れ馴れしい。風香さんでしようが!!?」

ローラーブレードを履いた風香が空を走る。

マジで、走っている。『流体』で固めてるのか?

「受け取ってよ?」

ロボットの頭上にあるリングを傷付けないようにそつと手に取る。
手に取る瞬間、まるでリングが取られたがっているかのように、ロ
ボットから自然と離れる。

「あら、簡単に取れたわ」

と言うと、オレに渡し、次のロボットへ。

そうして、オレたちは9個のリングを獲得した。

「ありがとう」

「ごちがいそ」

「さて、リングの分配はどうしようかしら」

「うーん。これからもロボットに遭遇するだろうし、とりあえず持つて歩けば良いんじゃないか？」

「モブ共、試験会場で仲良しゴツコとは……」

ババババババ

連続した爆発音と共に、不意に声がかけられる。

「テメエら、プロ舐めてんのか？ああん？」

入学試験（その6）

「ああん?」

ダイナマイト。

正式なヒーローネームはもう少し長い。
が、短く呼ぶ人の方が圧倒的に多い。

そんなことはどうでもいい。

インゲニウム、シヨート、あと1人くらいは、と想定していたが……
これは、最悪の想定に近いな。

「どうして、ダイナマイトが!?」

「インゲニウム、シヨートと来れば、もう1人くらいヒーローがいても
おかしくはないさ」

と話していると、

「『閃光弾』」

ダイナマイトの掌が光る。

「どうした? 戦場で《敵》は待っててくれないぜ」
しまった。プロヒーローの登場とあって、風香との会話に気を取ら
れた。

「リンゴが2人で9個だってな。壊したの入れりや10個だ。少しは
楽しませてくれよ!!?」

ダイナマイトが掌から放つ爆破を利用して、接近してくる。

「オラオラオラ!!?」

オレと風香が後退する。

その時、

『タスケテ』『タスケテ』『タスケテ』

『タスケテ』『タスケテ』『タスケテ』

『タスケテ』『タスケテ』『タスケテ』

と9体のロボットから、音声が鳴る。

どういうことだ。ロボットは《敵》じゃないのか?

「ヒーロー様よオ。助けを求める声が聞こえねえのか? 逃げ続けて良

いのかよ?」

ダイナマイトの猛攻は続く。足技を中心に襲いかかってくる。
「くっ」

「速いな（『アキレスと亀』を発動するタイミングが……）」

おそらく手加減はされている。ダイナマイトは、直接攻撃としては個性を使つてこない。にも関わらず、防戦一方だ。

流星に、学生時代に個性大戦を経験してないってことか。

ダイナマイトの猛攻を避けつつ、風香に話しかける。

「風香。オレを信じてくれるか」

「ここまで来て一人で逃げ出さないわよ」

「ありがとう、その言葉で十分だ。これから個性を発動する」

「何をするの?」

「簡単に言えば、状況を細分化することが出来る。ロボットは任せた、ダイナマイトは任せてくれ」

「分かったわ」

「行くぞ、『行列』発動」

『行列』

言うまでもなく、有名店に並ぶ時の行列ではない。

数学の行列だ。

連立1次方程式ってのは聞いたことあるだろ?

行列ってのは、その数字と文字を分けて考えて、数字の方だけを四角形の形に配置して考えることで、方程式の答えを簡単に求めようって考えた。

厳密には、そこから始まる壮大な物語なんだけどな。

そして、四角形に配置した際には、横のまともりに見ていた数字を、縦のまともりとして見ることもある。

現在の状況で言えば、『ロボットとダイナマイト』と『オレと風香』というまともりを、『ロボットと風香』と『オレとダイナマイト』というまともりとして見たってことだな。

さして。

どうなるかというところ

「行かせるかよオ!!?」

ダイナマイトが風香に迫る。

その爆風で加速した足技が、風香のローラーブレードを狙う。

「風……」

「そのまま進め!!? 風香」

「!?? 分かったわ!!?」

「何をゴチャゴチャと、言ってるやが……る!!?」

間違いなくダイナマイトの足技はローラーブレードを捉えていた。しかし、その一撃は何も破壊することなく、空振りしただった。

入学試験（その7）

ダイナマイトの足が空を切った。

オレが発動した“行列”の効果によるものだ。

“行列”の最大の効果は、まともりの組み替えを行った後は、まともり同士はお互いに干渉できなくなるのだ。

風香はそのままロボットへと向かう。

「テメエの個性か？随分と立派な個性じゃねえか」

「お褒めいただき光栄です」

「全速力でテメエを倒す。気絶させりや、個性も解けんだろ。爆速

ターボ」

「アキレスと亀」（と“フィボナッチ数列”）

ギリギリ発動が間に合う。ダイナマイトの爆速ターボからの足技はオレには届かない。

「!?？」

ダイナマイトの足技に合わせて、正拳突きを繰り出す。

“1、1、2、3……”

「なんだア!?？ そのパンチは!!？ やる気あんのかア!?？」

分かっているさ、当たるわけない。

だけど、それで良いのさ。

“5、8、13、21、34……”

どちらも当たらない攻撃を何度か繰り返した時、ダイナマイトが我慢の限界を迎えた。

「ちまちまと面倒なヤツだなア、おい!!？ 気合い入れて、歯ア、食い

しばれよ……」

何かするつもりか。

掌から爆風を放ち、猛スピードで飛んでくる。

あれは、かの有名な……

「榴弾砲着弾」（か）

ダイナマイトに合わせ、個性を解放する。

「“フィボナッチ数列 55”」

左の正拳突きを繰り出す。

正拳突きに弾かれた空気弾が、ダイナマイトへと飛ぶ。

「クソナードの真似事かア!!?!?!?」

オレの空気弾を簡単に吹き飛ばし、榴弾砲着弾が炸裂した。
辺り一面が爆炎に包まれる。

爆風を受け、オレは吹き飛ばされた。

……相性悪かったな。空気は熱に弱いしな。

吹き飛ばされ意識を手放しながら、

「そこまで。試験終了だ!!?!?!?」

「よく頑張ったね。全部見ていたよ」

というインゲニウムとウラビティの声を聞いた。

—————

「うん?!?!?!はどこだ?」

目を覚ましたオレの視覚は、見知らぬ天井を。

嗅覚は良い花の香りを。

聴覚は誰かの優しい寝息を。

そして、触覚は何か柔らかな感触を、捉えていたのだった。

(うお?!?!? これはまさか……)

柔らかな物体は、オレの二の腕付近で動いている。

どうやら彼女の呼吸に合わせて動いているようだ。

(せ、青春だ!!?!? この世界に転生して来て、初めての青春っぽいイベントだ!!?!?)

オレは普通の30歳だった。だから、それなりに青春というものも経験した。だが、もっと高みを求めれば良かったと、後悔していた。そして、今、青春が目の前に転がっている。

だが、オレは自分の身体を指先1つ動かすことが出来なかった。

(ダイナマイトと戦ったダメージか? ちくしよおおおお!!?!?)

結局、オレは風香が目覚めるまで、身動き一つ出来ずにベッドの上で過ごしたのだった。

入学試験（教師サイド）

「みんな、今日はお疲れ様。それじゃ早速で悪いんだけど、A会場の評価を始めようか」

緑谷が議長だ。

スツと綺麗に手を挙げ、飯田が続く。

「緑谷校長。氷城くん、水流くん、土竜くん、聖香くんの4名が妥当かと思う」

「異議なし。俺の氷結を避けられたのは、その4人だけだ」

と轟。

「ああん!?? 氷城つてヤツは、俺が吹き飛ばしたじゃねえか」

「かつちゃん……でも、そもそも榴弾砲着弾とかの必殺技は禁止ってことだったよね?」

「黙れクソナード!!? 雄英の校訓は『Plus Ultra』だろうが!!?」

「じゃあ、氷城くんの実力を認めたってことやね?」

「口を挟むな、丸顔!!?!!? あの榴弾砲着弾はなあ、手加減に手加減を重ねたヤツなんだよ!!?」

「…必殺技は必殺技じゃねえのか?」

と言う、轟の顔は、お得意のトボけた表情だ。

……爆豪にそんな言い方したら、拗れるに決まってるじゃん。

短い付き合いじゃないんだからさ。

すると、

「轟くん、麗日くん。話が進まない。爆豪くんの話は一旦置いておこう」

「なんだと!??」

と答えた爆豪が、ストーンと落ち着く。

心操の「ペルソナコード」だ。

……これは、後が怖いね。

「話を進めよう。試験会場は、まだまだあるんだから」

「ありがとう、心操くん。後でかつちゃん怒るだろうなあ……。うん、

氷城くんのごことは後で聞くとして、他の3人についてはどうか？」
緑谷がまだ意見を述べていない、麗日、心操、ウチを順に見ながら話す。

「爆豪くん係やったから……ホンマは2人で行くべきなんやけど、爆豪くんが譲らへんくて。水流さんとは直接戦ってないんやけど、即席で組んだ人を信じて頑張ってはったよ」

「聖香の『ステータス』は補助系の個性だ。相手のことを知る……これだけで誰かのサイドキックであれば、何もせずとも立派に勤められる。しかし、どうやら彼女は前線に立ち、困難に立ち向かいたいようだ」

「ウチは全体を見てたから細かいことは分からないけど、聖香さんは個性のおかげもあって、轟の存在には気付いてたっぽい。氷城くんと水流さんは、轟が氷結を発動してから動き出したから、反応速度は素晴らしいと思う。土竜さんは氷の中にいたけど、『サラマンダー』で出てきたね」

「途中で氷城くんの独り言に点数を付けていたが、あればどうだ？」
「気にしないでいいよ。最終的に勘違いしたままだったっぽいのが、残念だけど」

「あ、それがそうでもないんよ。水流さんな、氷城くんのごことが心配で、連れて行った場所を聞きに来たんよ。そんな時にな、ふと気になつて聞いてみたんよ。『ロボットを破壊じゃなくて、停止させようと思っただのはなんで』って。そしたら……」

「『『そしたら？』』』』」

この場にいる爆豪以外の5人の声が揃う。

「ちようど爆豪くんの足技が当たるタイミングの時に、氷城くんの声がしたんやって」

合格発表

天国と地獄が共存したあの入学試験から、3日が経過した。雄英の合否発表の日がやってきた。

全国から注目されている入学試験だ。

インターネット上で合否を公開することは出来ない。

すでに世界には様々な個性がある。パスワードを簡単に突破したり、改竄したり出来てしまう可能性がある。

ところで。

インターネットでの、安全性を保証しているものを知っているだろうか？そう、かの有名な素因数分解という計算が根底になっている。

大きな素数同士の積から作られた数を素因数分解することが困難なことから安全性を保証している。

例えば、ある2つの素数の積が「99221」になるような2つの素数は？と聞かれて、答えがすぐに出てくるだろうか？

無理だろ。

しかし、しかし、しかし。

オレの個性は「数学」。

そう、素因数分解など一瞬で出来るのだ。

ちなみに、313と317の積だ。

ということは、どういうことか。

オレは世界中から狙われる存在にもなれるってことだ。

だって、あらゆる暗号を突破出来るんだからな。

あれ？ということは、表向きの個性の説明を考えないといけないのか？面倒だから物理干渉系ってことにしとくか。

やれやれ。のんびり青春を楽しむつもりなんだがな。

まったくこの世界は、オレの善性に感謝して欲しいぜ。

閑話休題。

合否発表の方法に戻るが、雄英高校が選択した方法は、学校での手渡しである。時代から2周くらい遅れている感じもあるが、安全性のためには、これが一番だからな。

顔を合わせて、相手を確認しての連絡。

……2周では済まないか。

戦国時代とかか？など適当なことを考えていると、雄英高校に到着した。

校門には、個性大戦で公式には引退を表明したしたヒーロー イレイザーヘッドが待ち構えていた。

「氷城風樹だな？」

「そうです」

《OK》

「よし。入っていいぞ」

「今のは？」

「雄英高校を守るための仕組みの1つだ。詳しくは話せん。心操」

イレイザーヘッドが、付近で待機していた若い先生だろうか？を呼ぶ。

心操といえば、非公式ながらサポート系ヒーローの上位にランクインするプロヒーロー：ハンドルヘッドじゃないか。

「はい」

「案内をしてやってくれ」

「分かりました」

「こつちだ。着いてきてくれ」

ハンドルヘッドが言う。

右や左に進んでしばらくすると、ハンドルヘッドに話しかけられた。

「『数学』という個性は、『テレパス』のような使い方も出来るのか？」

「え？んーと、やったことではないですけど、出来ると思いますよ。ただ、今すぐするのは難しいですけど」

「……そうか。この扉だ。自分で開けてくれ」

「はい……!?」

ハンドルヘッドの指示に返事をしたとき、オレは意識を奪われた。